

⑦-1 【 実戦投資講座 】 2003.07.11

早見は会員、非会員、友人、知人に至るまで、とにかく株式売買手数料を大幅に引き下げるよう、徹底してアドバイスをしています。

そのアドバイスに従って、私の友人であるA氏が、取引証券会社を準大手クラスのB証券から中小のC証券に替えました。ただA氏はパソコンが苦手なので、コールセンターに電話で注文を出す方法にしました。コールセンターの担当者は営業マンではないので、顧客の注文を機械的に取り次ぐだけです。

実はA氏は、某機械メーカーの株が好きで、この機械株D社に重点を置いて売買を行なっています。ちなみに信用取引はやらずに現物取引だけです。

さて6月上旬にD社株を売却した時の約定金額は590万円で、前の取引先である準大手のB証券に支払った手数料は5万915円。これに消費税2545円を加えた5万3460円が差引かれていました。

これに対して中小のC証券に切り替えて、改めて機械メーカーD社株を買い直しました。約定金額は519万4000円でした。これに対してC証券に支払った手数料は1万7674円、消費税は884円、合計1万8558円がコストです。

どちらも約定金額は590万円と519万円ではほぼ同じなのに、手数料はB証券に対してC証券は65・3%も少ないのです。つまり3分の1になっているわけですね。

しかもA氏の場合はコールセンターでの電話取引ですから、これがインターネットでのオンライン取引なら手数料はもっと安く済むはずです。

投資家の皆さん。皆さんは余りにもムダな手数料を払い過ぎています。この不況の時に徹底してムダな経費を削るのは当たり前です。

投資家の中でも特に中高年の方々や地方に住んでいる方々は、パソコン、インターネット、Eメールというものに拒絶反応を起こし、昔ながらの営業マンとのやり取りで注文を出している人が多いはずで

す。しかし、前出のA氏のようにパソコンは使えなくても、電話での通信取引で格安の手数料に引き下げられるのです。手数料が3分の1になるということは、今までなら買い値から10円上がらないとトントンにならなかったのが、3円も上がればトントンになるわけで、それだけ利食いがしやすくなるのです。ぜひ電話での通信取引に切り替えることをお勧めします。

参考までに格安手数料で電話取引が出来る証券会社をいくつかご紹介します。

- ◎ エイチ・エス証券 (0120-861-544)
- ◎ オリックス証券 (0120-779-104)
- ◎ 岩井証券 (06-6229-4641)
- ◎ 内藤証券 (0800-500-7110)

⑦-2 【 実戦投資講座 】 2003.07.18

株式投資に限らず、人生における成功者になるには、ここぞという大きなチャンスの時には、細かい事にとらわれず、果敢に攻めて攻めまくることが必要です。たしかにそれはハイリスクではありますが、だからこそハイリターンにつながるのです。

先日、たった50万円の元手を3レース続けて的中させて2億円に増やした人のニュースがマスコミを賑わせました。

A氏は6月1日の日本ダービーで、元手の50万円を単勝馬券（1着の馬を当てる）1点買いで的中させて130万に増やし、それを全額6月8日の安田記念レースでやはり単勝1点買いで1222万円に増やしました。普通ならここでやめるでしょうが、A氏は、またもやそれを全額6月28日の宝塚記念レースに単勝1点買いでつぎ込み的中。一気に2億円に増やすというホップ・ステップ・ジャンプの離れわざをやったのです。

常識的に考えれば、このような買い方は馬鹿げています。もしも3回目の宝塚記念レースがはずれたら、一瞬にして1222万円がパーになるのですから、一般庶民の感覚からすれば常軌を逸しています。

しかし、このニュースを聞いて、少なからぬ競馬ファンが『のるかそるか』（リチャード・ドレフィス主演）というアメリカ映画を思い出したのではないのでしょうか。

しがたないタクシー運転手が、ある日、調教師と馬主の八百長レースの話聞き、そのレースの大穴馬券的中させます。それを契機に彼は、その日の自分がいつもとは違う事に気づき、次のレースも大穴的中。手にしたお金を全額3つ目のレースにも単勝1点買いで大穴につぎこみ、みごとの的中させるというアメリカンドリームの話です。今回のニュースはこの『のるかそるか』とそっくりウリふたつ話です。

映画の中で、ヒーローにまつり上げられた主人公は、みんなの歓声の中で、大声で叫びます。「今日の俺はいつもと違う。ツイてるんだ。俺の金とみんなの持ち金を全部まとめて、ドーンと1点買いだ！！」

しかし、それを聞いた途端に周囲の人々は急に冷めてしまい、再び彼を無視して「ああでもない、こうでもない」と自分達のいつものくだらない予想談義に戻っていきます。この映画の最大のポイントは、まさにこの場面だと思います。

神様は誰にもチャンスを与えてくれますが、そのチャンスをつかもうとしないのです。

ごくわずかの勇気ある人だけが、積極的に手を伸ばし、一步を踏み出し、チャンスをもにします。ゆえに大多数の凡人が、凡人としてつまらない一生を終えたとしても、それは自分に勇気がなかったからだと言えます。

ここぞという時には断固として行動し、攻めなければ成功には繋がらないのです。

⑦-3 【 実戦投資講座 】 2003.07.25

『 東京直下型地震への備え 』

最近、ラジオたんぱの放送を聴いたりして、早見の話によく身近に接するようになった人々が多い。当社に新規入会してくる人たちも、ほとんどは早見との縁はまだ日が浅い。

以前からの当社の会員と、こうした新しい会員及びファンの人々たちとの大きな違いは、遠からず東京に襲いかかる大地震への備えの有無だ。

早見は、もう数年前から大地震への備えを訴え始め、すでに大底の時から金と金鉱株への投資を徹底してやらせてきたほか、円から外貨へのシフトもさせてきた。そして株式市場でも95年の阪神大震災の教訓から、不動建設の買いをコツコツと継続させている。

もし大地震発生となれば円と株及び債券が暴落し、金相場が急上昇する。そして膨大な復興需要をあてこんで建設株が地震後買い上げられていくだろう。不動建設はシンボル株になるはずだ。

つまり早見のファン、当社の会員としてやっていく腹を決めたなら、遠からず起こる大地震への備えを急いで行なう必要がある、金（ゴールド）と外貨、そして不動建設の株を少しでも手元に蓄えていかねばならない。既存の会員も、今一度その事を自覚しよう。

なお東京大地震についての早見の警告は、『九星気学と干支からみた2003年大予測』を参照のこと。申し込みは当社まで。ただし残部数あとわずか。

『週刊ヨミウリ・ウィークリー』の8月3日号に、大変注目すべき記事が出た。本来は夏が旬で、しかも夜行性のはずのクロアナゴが、今年は春先から、それも昼間から東京湾でどんどん釣れているという異変についての記事だ。

これがなぜ注目されるのかと言うと、95年1月に発生した阪神大震災の直前にも、震源地となった淡路島付近で同じような魚介類の異変が起きていたからだ。

アナゴやカレイ、イセエビといった海底に生息する動物たちは、地震の前兆である地殻の変動に敏感に反応する。地盤が動く時に発生する地電流に驚いて、海底から海面近くへ上がってくるのだ。

例えば2000年の三宅島大噴火の直前には、イセエビが通常の10倍も水揚げされたし、阪神大震災の時には1週間前から淡路島付近でカレイが姿を消した。関東大震災の直前にも、隅田川河口でカレイやハゼ、ウナギが大量に水面に浮上してきていた。

岡山理科大学の弘原海（わだつみ）教授によると、海底生物が地震の前兆を感知するのは、発生の1～3ヶ月前のことだ。したがって春先からアナゴの異常が始まったので、もしこれが大地震の前兆とするなら、いつ起きても不思議ではないと言える。

早見が「まだ東京株式市場は歴史的な大底を打ったとは言えない」としているのは、この大地震のリスクがのしかかっているからだ。

⑦-4 【 実戦投資講座 】 2003.08.01

『 東京直下型地震への備え② 』

前回、東京に襲いかかる大地震のリスクについて警告したところ、間髪を入れずに宮城県で阪神大震災を上回る大地震が発生した。幸い人口が少ない農村地帯だったので死者もなくて済んだが、早見のファンの方々はさぞギクッとしたことだろう。なにせ早見から耳にタコが出来るほど大地震への備えをアドバイスされて、かねてより金や外貨、不動建設株の仕込みを行なってきたからである。

来年2004年は、九星気学で言うところの五黄土星（ごおうどせい）の星回りである。この五黄土星というのは、「天地が極端に裂ける」という意味を持っている。人間にたとえれば成功か破滅か極端に別れる運命の暗示なのだ。

実に恐ろしいことに、日本にとって五黄土星の年は最大級の災厄の年なのである。

前回の五黄土星の年だった95年に阪神大震災が起こった。その前も、関東大震災や前回の東海大地震と富士山大噴火が重なった江戸時代の宝永大地震&富士山噴火などは、いずれも五黄土星の年に起きている。

しかも、五黄土星の前年は六白金星だが、1778年に伊豆大島が史上最大の大噴火をしたのも六白金星であった。

また、2004年は申（サル）年だが、その前年は未（ヒツジ）年である。1703年の未年に元禄大地震が起きて、現在の神奈川県川崎市から小田原市にかけての地域が全滅した。つまり関東大震災と同じだったのである。

このように歴史のサイクルは2004年をはさんで、その前後に東京から神奈川、静岡に至る一帯に大地震が発生する危険が大きいことを示している。

東京直下型地震は、今や、この瞬間に発生してもおかしくはない。

大地震の前に、地表で揺れを感じないサイレント地震が発生することが知られているが、89年12月に東京湾のド真ん中の海底で、マグニチュード8クラスの巨大なサイレント地震が起きていたことが明らかになった。つまり東京湾の真下で風船がパンパンに膨れ上がった状態になっており、いつ破裂してもおかしくない状況になっていると言える。

ちなみに東京湾北部地震（マグニチュード7）、江戸地震（同5.75）、江戸地震（同6）、明治東京地震といった東京直下型地震は、2002～2004年に対応する星回りで起きている。たとえマグニチュードが比較的小さくても、東京という巨大都市に大きな被害をもたらすだろう。ましてマグニチュード8クラスとなったら東京は全滅だ。

そうした途方もない巨大なリスクを無視して、何もリスクヘッジをしていないのでは自殺行為である。

⑦-5 【 実戦投資講座 】 2003.08.08

『 山崎種二に学ぶ 』

早見が古今東西の著名な相場師で、最も尊敬するのが日本の山崎種二（現在のSMBCフレンド証券の前身である山種証券の創業者）である。ここでは敬愛をこめて山種さんと呼ばせていただくが、戦後キャリアの長い証券マンや投資家で、山種の名前を知らない者は、モグリと言うべきである。まさに戦前から戦後にまたがる兜町の巨星であった。

早見は今こそ、山種に学ぶべきであり、山種に帰れと声を大にして叫びたい。なぜなら彼が財を成して百戦百勝と豪語した、その投資戦略の基本こそ、「デフレ買いのインフレ売り」だったからである。言いかえれば、不景気のどん底で買い、好景気の高値で売るという、典型的な逆張り戦法であった。

山種さんのエピソードは枚挙にいとまがないが、なかでも有名な話を書こう。

1929年の大恐慌によって日本も大不況に突入したが、そのさ中、山種はそれまでの「売りの山種」からガラリと変わって、1930～31年にかけて「買いの山種」になった。

当時、山種は東京に進出するため、兜町に新しい社屋ビルを建てようとして計画を進めていた。そこでまずビルを建設する資材会社の株を買いまくったのである。日本鋼管、秋田木材、浅野セメントなどが中心だったが、これが見事に的中。5円で買った日本鋼管は2年後に130円台に暴騰したのをはじめ、10円で買った秋田木材が40円に、30円で買った浅野セメントは70円に値上がりして莫大な儲けを手にした。

この巨額の利益で兜町の新しいビルはもちろん、千代田区三番町の自宅の建設費までも作ってしまったのである。まさにデフレ買いが大成功になったわけだが、これなどは現在の状況にそのまま当てはめてもおかしくはない。

たとえば建設資材の代表格と言えばH形鋼や棒鋼だが、早見はすでに今年初めから中山製鋼を買わせて大当たりをとったが、直近でも東京製鐵を買ってもらった。

今年に入ってから製鉄株の動きは明らかに今までとは大きく違う。電炉株は、まだまだ追いかけていけると思う。

デフレ買い、インフレ売りを実践するなら、鋼材だけではなく非鉄金属の株や商品先物も積極的に買うべきだし、不動産やゴルフ会員権も買いだ。

現に早見も2～3年前から個人的に金をコツコツ買い続けてきたし、先日13年ぶりにゴルフ会員権に買い出動して、手始めに1コースの会員権を手に入れた。不動産そのものは買っていないが、会員に対しては、不動産を買うことをお勧めしている。もちろん全国的にどこでも買いというわけではない。

いずれにしても、山種さんの考え方でいけば、今は歴史的な底値買いのレベルとみてよい。彼と同じやり方をやってみよう。

⑦-6 【 実戦投資講座 】 2003.08.15

『 山崎種二に学ぶ② 』

当社の会員の方々は、早見が昨年から「デフレからインフレへの転換を前提にした投資に切り替える」と口を酸っぱくして言い続けてきたことを知っているはずだ。

東京と大阪でのセミナーでは、特にその点について何度もみっちり話をしてきた。1999年以降、世界のトレンドは長らく下げ続けてきた商品相場が歴史的な大底を打ち、逆に空前の高値になっていた債券相場は歴史的な天井のところにあるので、債券を売り、低利回りの預貯金を解約して、商品や株、外貨で積極的に投資収益を追求する方向に切り替える指導を行ってきた。その読みがみごとに的中しているわけだが、これこそ山種さん流の「デフレ買い」の実践だったのである。

デフレからインフレに転換していくという事は、実物の値段が上がっていくということである。したがって今まで預貯金や債券の形で滞留していたお金は、金を代表とする商品や、株式、不動産、ゴルフ会員権といった実物資産にシフトしていくのが道理なのだ。

ゆえに早見は、まず第一に皆が見捨てていた金と金鉱株を底値でコツコツと買わせて、今年春からは株式投資を本格化させ、そして直近ではゴルフ会員権にも買い指令を出した。すべては大きなシナリオに沿っての行動であり、こうした一連の投資により数年後、十数年後に会員の方々は大きな含み益を作っているに違いない。

外貨への投資も同じだ。早見がブームになる前からいち早く仕掛けていったオーストラリア・ドルへの投資は、表面的にも4～5%台の高利回りが得られるうえ、オーストラリアは世界有数の鉱物と農産物資源国であり、まさにインフレで大きなメリットを受けるのである。

今でさえ日本とはケタ違いの金利差があるのに、インフレ傾向が本格化してオーストラリア経済が更に良くなれば、金利はますます上昇する。だからオーストラリア・ドル建てのMMFや債券は利食わずに長期保有すべきである。そうすることによって、ひとつ覚えのように安全性を重視して預貯金をしたり、歴史的超低利回りで債券を買っているような愚かな大多数の日本人とは比較にならない、驚くべき財産増加を実現させるだろう。

山種さんが実践して、早見が見習っているデフレ買いの逆張り投資は、大多数の人々から見ればリスクを取りに行くやり方だ。

が、しかし、相場はゼロにはならない以上、デフレの安値を積極的に買いに行くのは、愚かな大衆にとっては危険極まりないように見えて、実はローリスク・ハイリターン投資行動なのである。

逆にデフレの安値を買えない大多数の愚か者たちは、インフレの高値を買いに行き、ハイリスク・ローリターン投資行動をとる。どちらが真の勝利者になるのか、もはや言うまでもない。

⑦-7 【 実戦投資講座 】 2003.08.22

すでに繰り返し書いたり話してきたように、早見がここ2～3年徹底して実行させているのは、インフレへの備えである。

インフレに備えるために絶対欠かしてはならないのは、①投資資金を低利回りで固定化させない、②できるだけ実物にシフトする、③低利で借入金を作っておく、という3つだ。特に①と②は基本中の基本である。

したがって大多数の日本人がやっている安全性を重視して超低利回りで定期預金をしたり、国債を買うなどというのは愚の中の極愚。最低のやり方である。安全性を求めるのはインフレからデフレに移行する時のやり方であり、現在のようにデフレからインフレに移行していく時には逆に危険なのだが、これが一般大衆にはどうしても分らない。

どうしても分らない諸君に書いておこう。君たちは物事の道理がまるで分っていないのだ。物事の道理というのは大宇宙の普遍の真理であり、万物を支配する自然の法則である。

それは何か。別に難しいものではない。生じたものは必ず滅し、すべての事は移り変わってゆき、今の状態が永遠に続くものではない、という事だ。

経済は我々にそうした法則を最も分りやすく示してくれている。株価の変動は、その最たるものである。景気も同じだ。通常我々は一生涯の間に景気と株価の大きな変動サイクルを何度か体験する。それなのに多くの人々は「次にやってくる動き」に備えることが出来ない。それは貴重な人生経験を身につけられず、経験から学べない大馬鹿者である。だからバブルのピークで株や不動産を買って、デフレ不況で家計が破たんするのである。そんな愚か者たちをなぜ税金で救済する必要があるのか。本当に救うべきは生来の弱者であり、不慮の災いによって苦境に陥った人々である。経済原理によって自らの不明により沈没した者を救う必要はない。それは過保護だ。

安全性を求めて国債を買う人々よ。貴方たちはバブルの時に、なぜ高利回りの国債を買わなかったのか？

90年当時、10年物国債の流通利回りは8%台に達していた。それが今や1%台。つい先日までゼロコンマの超低利回りだった。こんなゼロコンマや1%台の超低利回りで10年間も財産を寝かすぐらいなら、90年当時、株や不動産など高値で買わないで、8%の高利回りで10年間寝かせておいたほうが、はるかに安全有利。ローリスク・ハイリターンだったはずだ。

だが現実には大多数の人々は国債を買わなかった。前号で書いたようにインフレのピークで株や不動産を買いきり、次にやってくるデフレ、価格下落を想定しなかったのである。

お分りか？大衆は常に愚かなのである。大衆は常に道理に反した行動をとり自滅する。今、多くの人々がリスクを取りに行かないからこそ、攻撃チャンスなのだ。

⑦-8 【 実戦投資講座 】 2003.08.29

とにかく財産を預貯金や債券から引き揚げて、株式、不動産、金、ゴルフ会員権などにどんどん替えていきなさい。

早見はすでに、世界中の人々が金（ゴールド）を見捨てていた時に、99年から大底で金の積立て買いを始めた。

続いて栃木県那須高原に広めの土地を買い、別荘を建てた。

さらに金投資に続いて昨年から三菱商事の積極運用商品ファンドの『アルゴオープン』に投資。

今年は7月に会員権相場が底打ちしたのを見て、東京都心から高速道路で1時間ほどの近場でゴルフ会員権を買った。バブルの頃に売却して以来13年ぶりの買い出動である。

私は自慢話をしているのではない。世間に向かってインフレへの対応を呼びかけている以上、自分自身も信念を持って行動しているのだということを知ってもらいたいから、自分がやってきたことを正直に公開するのである。

獅子文六の有名な小説『大番』の主人公ギューチャンは、実在の相場師・佐藤和三郎（1980年に78歳で死去）をモデルにしたものだが、彼はブルのギューチャン（またはブーチャン）と呼ばれたほど強気で買いまくるのが得意だった。その単純さゆえに、大儲けと大損を繰り返した。

ある時、彼の終生の相棒だった男が、たまりかねて忠告した。それは「株で儲けたら、利益の1割でいいから土地を買ってほしい」

その忠告を聞き入れて、ギューチャンは富士山麓のゴルフ場や箱根の旅館などを遺産として残したのである。そうした不動産投資を実行したのは、昭和20年代から30年代にかけての、戦後のインフレ期のことである。

その前も、戦前に軍部が台頭していく時も、彼は「軍需景気でインフレになる」と言って、郷里の大地主に実物投資を勧めるという場面が原作に出てくる。

さて、一般庶民が不動産をおいそれと買うわけにはいかない。

しかし、上手い方法がある。それは多くの土地を保有して、一株当りの含み資産が大きくて株価が割安な会社の株を買うことで、実質的な地主になるのだ。

早見が鉄鋼株の中で真っ先に中山製鋼を推奨したのも、有力な含み資産株だからだ。

その他にも含み資産株と言えば必ず出てくるのが片倉工業。あるいは東京西部の横田基地周辺に広大な土地を持つ昭和飛行機、立飛企業、新立川航空機。そしてもちろん不動産会社や電鉄会社などが出てくる。

こうした企業に狙いをつけて、実質的な不動産投資をやってみよう。

⑦-9 【 実戦投資講座 】 2003.09.05

『真のキャピタルゲイン狙いとは』

日本は第2次大戦後、米国から民主主義と資本主義が導入されたわけだが、それはまったく不完全なものであり、実際は悪平等の社会主義的なシステムになってしまい、日本人はぬるま湯的な形ばかりの資本主義に慣れ切ってしまっていた。

だが平成バブルが崩壊して、ついに日本は米国型の本格的な資本主義の洗礼を受けることになった。

今や金融機関をはじめとして、次々に外資系の看板に塗り替えられ、成果主義などにより賃金・雇用体系も激変してきている。

そこで我々は考えなければならない。**資本主義経済にあって、最も魅力的なものは何なのか。それはキャピタルゲインだということ。**

資本主義社会にあっては弱肉強食でなければならない。弱いものは強いものによって淘汰されたり、利用されるのが掟なのだ。そこに格差が生じる。その格差が大きければ大きいほど、それが利益を生むことになるのだ。

日本経済が弱体化して、日本の株価や地価が大きく下がる。その大きく値下がりしたものを買い込み、経営の立て直しや景気の回復で価値が値上がりして、大きな利益、つまりキャピタルゲインを得ることこそが資本主義で最も魅力的な経済行為なのである。

ゆえに骨の随まで資本主義がしみ込んでいる海外の投資家や企業は、深刻なデフレで価格が大きく下がった日本の株や不動産をどんどん買い込んでいるのである。

日本国内の年金は運用に行きづまり、代行返上売りなどの形でデフレの底値で株を投げ売りしている。

これに対して外国人投資家は4月第3週から8月第3週までで合計4兆8929億円も日本株を買い越した。連続買い越し記録として過去最高だった95年11月第4週～96年5月第4週までの合計4兆1222億円を上回り、しかも前回の3分の2の期間で記録を更新したことは特筆すべきことである。同じ運用でも国内勢と海外勢では正反対だ。

言うまでもなく理に叶っているのは海外勢である。**デフレの次はインフレ、不況の次は好況がやって来るのだから、デフレ不況の終末期には積極的に株を買うことによって、次のインフレ好況で莫大なキャピタルゲインを得られるのである。**

9月1日に、東京・日本橋の三越本店で、『100万円均一セール』が開かれた。自分のブロンズ胸像を作る権利や、来年1月の藤田まこと主演の舞台貸し切りなど、用意された56品目は即日ほぼ売り切れた。もちろん三越ならではの富裕顧客層が元気であることを示している。

振り返ってみれば平成バブルも85年のプラザ合意以降、不景気の中で円高と共にスタートしたのではなかったか。繰り返す言う。インフレに備えて実物投資を続けていこう。

⑦-10 【 実戦投資講座 】 2003.09.12

『9月中旬、東京大地震発生か！！』

早見は恐怖の星回り・五黄土星の2004年を前に、東京が大地震に見舞われる危険性が一段と大きくなってきていることを、声を大にして警告している。

先日も静岡市でファイナンシャルプランナーの勉強会で講師として招かれ、東海大地震と東京大地震に対するリスクヘッジを一刻も早く行なっていくべきだと、強く訴えてきた。

そんな折り、**八ヶ岳南麓天文台の所長である串田嘉男氏が、FM電波を使つての観測の結果、東京から神奈川にかけての一带で、近日中にマグニチュード7クラスの大地震が発生する前兆をキャッチ。8月中旬から公式にこの前兆情報を公開して、重大な危険に備えるよう注意を呼びかけている。**

串田氏の観測によると、東京から神奈川にかけての一带でマグニチュード7・2プラスマイナス0・5（つまり6・7～7・7の範囲）の大地震が起こるとみられる時期は、9月16、17日を中心にプラスマイナス2日（つまり、おおよそ9月14～19日の間）とズバリ明言しており、その確率は60%ぐらいとのことだ。

串田氏は8年間にわたるFM電波を利用した観測の結果、数々の大きな地震の予知に成功してきた。

今回の場合、社会的パニックを心配しつつも、万が一大地震が発生した時の甚大な被害を考えると、情報は速やかに公開すべきだと確信しての行動だ。

串田氏は民間の研究者であり、その手法に疑いの目を向ける人々もいるが、北海道大学の森谷助教授や千葉大学の鷹野助教授のように、学者の間からも評価する声が増えている。

串田氏がキャッチした今回の大地震の前兆とされる観測結果は、全50台の観測装置のうち33台でとらえられている。8年間の研究の中で、今回と同じように異常な動きになってきたのは、今年1月19日の東海道沖地震しかなく、非常に気になる。

関東大震災が発生してから今年で80年となるが、南関東一带は、今この瞬間に大揺れになっても、けっして不思議ではない。

そして仮に今月大地震が起こらなくても、来年が一番危険な年になる。

なにせ阪神大震災、関東大震災、宝永大地震（前回の東海大地震）と、その直後に起きた富士山大噴火など、いずれも五黄の年に起きた大規模な災厄だ。

今回はどうなるのか。9月14～19日の間には連休も入っている。なるべく東京を離れて何とかなるように旅行へ行こう。

なお詳しいことは串田氏のホームページで。

<http://epio.jpinfo.ne.jp/>

⑦-11 【 実戦投資講座 】 2003.09.19

『会員制週刊レポートが驚異的好成績！！』

早見の会員制週刊レポートが今年4月10日に復活してから5ヵ月が経過したので、ここで推奨銘柄の成績を振り返ってみよう。

週刊レポートは3～6ヵ月以内での十分な利益を想定しているので、推奨後6ヵ月以内にどれだけ値上がりしたかを調べてみた。

なお週刊レポートは毎週木曜日に発送しているので、早い人は金曜日のうちに買いつけることが出来るが、土曜日に届く地方の人も多いので、推奨値は週明け月曜日の寄り付き値として計算している。

6ヵ月以内値上がり率

| | | |
|-------|-------|--------|
| 4/10号 | 日本無線 | 146.8% |
| 4/17号 | ラサ工業 | 20.6% |
| 4/24号 | 富士通 | 104.9% |
| 5/15号 | 住友重機 | 124.4% |
| 5/22号 | 学研 | 47.2% |
| 5/29号 | 河合楽器 | 74.7% |
| 6/5号 | 兼松 | 32.6% |
| 6/12号 | ツガミ | 45.0% |
| 6/26号 | 松尾橋梁 | 68.0% |
| 7/3号 | 台糖 | 0.3% |
| 7/10号 | 西島製作 | 0.4% |
| 7/24号 | プレス工業 | 33.7% |
| 7/31号 | 住友鉱山 | 31.2% |
| 8/14号 | 神鋼電機 | 8.9% |
| 8/21号 | 神鋼電機 | 11.8% |
| 8/28号 | 丸井 | 10.1% |
| 9/4号 | 東洋エンジ | 4.3% |
| 9/11号 | ツツミ | |

以上のように5ヵ月間で、のべ18銘柄推奨したが、まだ推奨後日が浅い8月以降の分を除外して、住友鉱山までの13銘柄で調べてみると、明らかに不発だったのは台糖と西島製作の2銘柄だけだから、的中率は実に84.6%に達している。

的中した11銘柄の平均上昇率は、なんと66.3%だ。しかも2倍以上に大化けしたものも3銘柄出ている。3～6ヵ月以内に十分な利益を上げるという目的は、達成されていると言っていいだろう。

先日、松尾橋梁を買った入会したばかりの人が、「週刊レポートを読んで買っても儲からない」と捨てゼリフを吐いて退会したが、それを待っていたかのように松尾橋梁の株価は火がついたように急上昇していった。

4月以降の高いパフォーマンスを知っていれば今頃大きな利益を手にしていただろうに、早見を信じきれず、こらえ性のない愚かな小市民投資家は、こうしてまた欲求不満の地獄をさ迷うのである。

⑦-12 【 実戦投資講座 】 2003.10.03

『大地震への警戒を怠るな！！』

ここでの押し目を利用して改めて買いをお勧めしておきたいのが不動産です。9月半ばに民間の研究者が大地震の発生を予告して、マーケットでも話題になりましたが、幸い予告されていたマグニチュード7・2前後の巨大地震は起こりませんでした。しかしだから安心というわけではないのです。何故ならばそもそもこの民間の研究者は、9月半ばに大地震が起きなかった場合第2の可能性として、10月末以降にマグニチュード7・2以上の大地震が起こる可能性が30%ほどだと予告していました。

実際この民間研究者によりますと、9月末現在でも南関東地域で大地震の接近を予告する異常反応が検知され続けているという事です。また地震発生前に起こるといふ地電流を観測しているグループも、関東地方にはマグニチュード7・5クラスの大地震を起こす巨大なエネルギーを蓄積しており、当初民間研究者が予告していた9月中旬に大地震こそ起きませんでした。予告していた時期に千葉県鴨川市付近に90年ぶりにマグニチュード5・5の強い地震がおきました。

この千葉県鴨川市付近というのは琉球大学の木村教授がかねてから警告している房総半島南東部沖巨大地震の発生が予想されるドーナツ状地域の部分です。これについて木村教授は、問題の房総半島南東部沖空白地域での大地震については2年以内にマグニチュード7・2以上の規模で発生すると推測しています。したがって9月20日の地震はたとえ巨大地震ではなくても実は研究者の間に緊張感を高める動きであったわけです。

したがって東京から東海地方にかけて歴史的に大地震の当たり年とされている五黄土星の2004年を迎えるにあたり、投資家は出来るだけリスクヘッジを行なっていかなければなりません。そのために私は時間をかけてかねてから不動産を買ってもらってきたのです。今年に入ってから早見の指示に従って買って来た人はこの株で十分に儲かっていますが、まだ買っていない人はいまからでも仕込んでおきましょう。ディスクロベースの信用取り組みも8月29日時点では買い残が618万株、カラ売り残高が85万株、取組倍率7・7倍だったのが、9月26日時点では買い残が893万株、カラ売り残高が313万株で、取組倍率は2・8倍に縮小しています。思惑が高まり今後の一段高が期待できそうな雰囲気になってきています。

⑦-13 【 実戦投資講座 】 2003.10.10

『月足連続陽線に注目』

早見が一貫して持続させている銘柄のひとつに大京（8840）がある。平均コスト187円で買ってもらい、9月24日に262円まで4割高になっている。

この株の月足チャートを見ると、今年4月から9月まで6本連続陽線。10月も6日現在で7本目の陽線になっている。昨年10月に34円で大底を打ったあと、まさにドン底からの月足7本連続陽線というのは、ただならぬ動きと言える。

前回98年10月の安値103円から99年6月の高値449円まで上昇していった時は1本陰線をはさんで陽線3本で天井を打った。

さかのぼると89年5月から1本陰線をはさんで5本陽線で6510円の大天井を打った時以来14年ぶりの動きであり、しかも上場以来初めてのパターンである。

月足で6～7本もの連続陽線が大底値から出現するというのは、そうそう見られるものではない。

だが、探してみるとピタリ同じパターンがあった。それは85年にスタートした建設株の大相場である。当時の月足チャートを見ると、大手ゼネコンの株価は、84年10月に大底を打ち、85年春先から突如としてグングン上がり始めた。

たとえば清水建設は85年3月から9月まで6本陽線を入れた。大成建設、大林組、鹿島、フジタなども同じであった。

また三菱地所も途中で陰線を1本はさんだものの、85年2月から10月までの間で8本もの陽線をマークした。

こうした大底からの建設、不動産株の強烈な値上がりが見られたあとに、85年9月のプラザ合意が飛び出し、日本は平成バブルへと劇的に変わっていったのである。

今回は、大京の他には藤和不動産が今年3月から10月まで8本連続陽線。長谷工が陰線を1本はさんで2月から10月までで8本の陽線をマークしている。

その他東急不動産、三井不動産、三菱地所、住友不動産、東京建物、大林組、清水建設、鹿島、三井住友建設、五洋建設などが6～8本の陽線をマークしている。

つまり85年相場とウリふたつの現象が目の前で起きているのである。これが何を意味しているのかに一刻も早く気づくべきである。

前回は、その後プラザ合意を経て、ウォーターフロントという都市再開発の流れに火がついていったが、今回も都市再生という大きなテーマが浮上してきている。東京都心部の地価も上昇に転じた。

バブル崩壊後、さんざん売り叩かれてきた建設、不動産株が息を吹き返し、大逆襲に転じる時がやって来たのである。このセクターを徹底的に追いかけてみよう。

⑦-14 【 実戦投資講座 】 2003.10.17

前回、月足連続陽線のパターンを取り上げて、大京をはじめ、建設・不動産株がただならぬ動きになってきていることを解説した。大京は、その後10月10日に267円まで値上がりして、9月24日の262円を抜き、年初来高値を更新した。読み通りの強い動きになっているわけだが、こうなると次の大きなポイントは、月足の一目均衡表で雲の上に抜け出すことである。

一目均衡表で言う《雲》というのは、株価の上値または下値での抵抗ゾーンのことである。大京の場合、下から株価が上げてきて、現在抵抗ゾーンである雲の中に入っているのだ。ところが273円をつけると、この月足の一目均衡表の雲の上に、ついに抜け出す。これはバブル崩壊後初めてのことであり、大京の株価は完全に大転換したと言えるわけだ。

月足で9月までで6本連続陽線という強さを考え合わせると、大京の大上昇相場はかなり大きいと見なければならなくなる。

これに対して、未だに昔のイメージにとらわれている人々も多く、早見が7月に170円台で買いの大号令を出した時も、「この株は再び100円を割る」と言っていた向きもあったようだが、その後の経過は早見の予想通りであり、弱気派は大損する羽目になっている。

月足の一目均衡表で雲の上に抜け出すというのは、極めて大きな抵抗ゾーンを突破したわけだから重要な意味を持つ。

大京以外にも、東京製鐵、日新製鋼、大太平洋金属、住友不動産、東京建物、大成建設、大和ハウスなどが達成済みだ。

大太平洋金属は7月に217円で突破したが、そこから10月の高値456円まで2・1倍に大化けした。住友不動産も7月に631円で突破したが、そこから10月の高値1029円まで63%上昇している。月足の一目均衡表で雲の上に抜け出したところで飛びつき買いをしても、十分に大儲けになっているのだ。

したがって、上に抜け出して日が浅い東京製鐵や大成建設なども、今後の値上がりが期待できるし、大京も上に抜け出してから、更に大化けしていく可能性がある。早見を笑った向きは、自分が泣くことになるだろう。

投資の王道は、チマチマと小遣い銭を稼ぐことではない。巨大な波に乗って財産を大きく増やしていくことにあり、特に株式では、それこそが醍醐味なのである。

その観点で見ると、建設・不動産・鉄鋼といったところには、明らかに大きな上昇トレンドが生じている。この大きな波に乗っていかねばならない。カラ売りなど論外だ。

大京に続いて、大林組、清水建設、鹿島、三菱地所なども月足の一目均衡表で雲の上に抜け出してくるだろう。ユニチカもそうだ。内需系中・大型株が一段と買い人気を集めていくに違いない。

⑦-15 【 実戦投資講座 】 2003.10.24

相場の実勢を示すのは日経平均よりもTOPIXの方である。日経平均は値がさ優良株指数と考えるべきだ。

さて、そのTOPIXだが、4月の大底値770ポイントから10月17日に1100ポイントの水準まで上昇してきた。これで36ヵ月（3年）移動平均線の1044ポイントを大きく上回った。

TOPIXが36ヵ月線を上回ったのは、ITバブルの大天井である2000年2月の1757ポイント以降で初めてのことである。しかも8月に12ヵ月線が上向いたのに続いて、今月は24ヵ月線も上向きに転じており、中長期的なトレンドの転換を示している。

36ヵ月線を下から上に突き抜けたのは、前回は99年4月であった。この時36ヵ月線は1360ポイントの水準だったが、これをクリアしたあとTOPIXはITバブル相場で本格的に上昇していき、2000年2月の大天井1757ポイントまで約400ポイント、率にして29%上昇していったのである。

また95年の底打ち相場の時も、36ヵ月線を突破したところから、更に約225ポイント、15%上昇していった。

このように95年、98年と大きな底打ちをしたあと、TOPIXは36ヵ月線を抜いたところから、更に大きく値上がりしている事実注目すれば、今回もこれで上昇が終わるのではなく、これからもっと値上がりするとみておくべきだ。

しかも底打ちしてから36ヵ月線を上回るまでの東証1部の累計出来高を見ると、95年の時は6～12月で合計582億7千万株。98年の時は98年10月～99年4月で合計708億4千万株であった。これに対して今回は4月からここまでの合計で1753億6千万株にも達しており、ケタ違いである。

つまりITバブルの時をも軽く大幅に上回って大変なボリュームを伴っているわけだから、いかにオンライン投資家のデイトレードがすさまじいとは言っても、これはただ事ではない。

仮に95年の時のパターンを当てはめて、ここからTOPIXが更に15%上昇するとしても1200ポイントが目安になる。2000年の大天井から今年の底値までの下げ幅の半値戻りが1263ポイントだから、いずれにしても現在の1100ポイント前後から、1200ポイント台への値上がりを見込んでよいだろう。

TOPIX以上に強いのが新日鉄だ。すでに36ヵ月線すら上向きに転じており、出来高も95～96年は月間で最高2億株がやっと。98～99年の時も4億株がやっとだったのに、今回は8月に11億株台に達したほか、6月以降7億株以上をキープしており、これもまたケタ違いのボリュームを伴っている。

この上昇相場の行き着く先が、新日鉄のディーリング相場になるとの方向性が浮かび上がってきているように思える。

⑦-16 【 実戦投資講座 】 2003.10.31

ひと頃、株式市場で注目を集めたK氏が関係する仕手集団・Tだが、その手がけた銘柄のシンボルであったルックの株価が、ついに崩壊した。これにより、この仕手集団の活動は完全に過去のものになったと言える。

ルックの株価は年初に200円台であったが、7月には2160円まで大化けした。これに引っ張られる形で日特建設が240円台から817円まで上昇、ナカノコーポレーションが50円台から389円まで上昇、兼松日産が100円がらみから429円まで上昇するなど、今年前半の低位株人気に乗って、こうした仕手株が注目を集めた。

ところが6月に一連の仕手株が天井を打って総崩れとなり、悲惨な下げを見せた。これで早見は事実上仕手株相場は終わったとみたわけだが、最後まで頑張ったルックも、7月に天井を打って崩れ、10月24日にはついに千円の大台も割り込み970円まで下げた。これで最高値からの下落率は55・1%になった。

仕手株の相場においては、短期間で高値から半値以下になったものは復活出来ないというジンクスがある。

例えば、同じK氏が手がけた95～96年の仕手株のシンボルだった兼松日産は、96年7月の天井5310円から9月の1220円まで一気に77・1%もの下落率という大暴落になった。そこから11月に3620円まで急反発したものの、再び崩れていき、98年には210円まで暴落していった。

同じくK氏が99年に仕掛けたシンボルが井筒屋だが、これも99年7月に1380円で大天井を打ったあと、10月に355円まで一気に74・3%も下落した。そこから11月に586円まで反発したものの、翌2000年5月には112円の安値をつけるに至った。

このように高値から短期間で半値以下になった場合、たとえ反発があっても、その株の相場はもはや終わっているのだから、断固として戻り売りをしていかねばならない。ルックも高値から半値ラインは1080円だから、10月24日の急落で、ついにそのラインを割った。ゆえに、それまでは反発を狙って買ってみるという手もあったが、もう買いはダメなのだ。

それにしても皆さんは気づいているだろうか。兼松日産、井筒屋、ルックとシンボル3銘柄はすべて7月に大天井を打って、以後は3ヵ月ほどで恐ろしい大暴落を演じてピリオドを打っているのである。毎回毎回、みごとに同じパターンの繰り返しだ。

そうした仕手筋、仕手株の習性を頭に入れて、冷静についていくなれば妙味もあるが、仕手筋や仕手株にのめりこみ、ホレこんでしまうようなら愚かである。

泣いても騒いでも、仕手筋は貴方のために面倒をみってくれるわけではないからだ。最後はいつも泣くのは愚か者たちなのである。

⑦-17 【 実戦投資講座 】 2003.11.07

毎週木曜日、朝8時35分から、ラジオたんぱで『早見雄二郎のズバリ投資作戦』が大好評放送中です。

毎回ズバリとお出しする注目銘柄は、原則として1銘柄だけに厳選しており、毎回、木曜日は「早見銘柄」が寄りつきから大量の買い注文を集めて、買い気配を切り上げていくため、今や「木曜日の早見銘柄を予想するダイヤルQ2」まで登場してきました。競馬じゃあるまいし、ライバルの投資顧問会社や株式評論家の推奨銘柄を予想して稼ごうとするなんて、商魂たくましいと言わなければならないか、恥知らずと言わなければならないか。もっとも、この手の「早見銘柄の予想」は、ほとんどの中していないようですから気をつけて下さい。

さて、1月に放送開始以来、ラジオたんぱの推奨銘柄は高的中率、好パフォーマンスをあげています。

1月9日から10月30日までの間で、のべ35銘柄を推奨しましたが、放送日の寄りつきで買ったとして、その後6ヵ月経っても上昇率が10%に届かなかった不発銘柄は8銘柄しかありません。そのうち10月30日に推奨したばかりのダイヘンを除くと実質7銘柄。つまり的中率は今のところ80%をマークしています。言いかえると、たとえその日が買い気配で始まって、高く買ったように思っても、8割の推奨銘柄はそこからさらに10%以上の値上がり率をマークして、十分に儲かっているのです。

的中した8割の銘柄の平均上昇率は、実に56%にも達しています。そのうち2倍以上に大化けした銘柄も3銘柄あります。70%以上2倍未満のものも4銘柄ありますから、早見のファンの方々にはたまらない魅力でしょう。

ラジオたんぱの推奨銘柄のポイントは、第1に、毎回たったひとつしか取り上げないので目移りしないことです。通常は多くの銘柄を出して、そのうちどれかが当たるというパターンですが、早見は常に絞り込みますから、より多くの人々が喜ぶのです。

第2のポイントは、そもそも軒並み買い気配で始まり、スタートラインから大きなハンデを背負っているのに、それをハネ返してさらに値上がりさせていく力強さです。

早見が買い推奨すると、必ずケチをつけて逆にカラ売りを仕掛けてくる向きもありますが、振り返ってみると一時的な値下がり幅よりも、その後の値上がり幅のほうが大きいケースがほとんどなので、やはり素直に買っていくべきです。

10月2日のラジオたんぱで推奨した東急建設は、その日の寄りつきが13円高の500円でしたが、11月5日には1730円まで3・46倍にも大化けしました。1月の放送開始以来最大の特大ホームランになったわけです。早見銘柄への注目度は高まる一方です。これからも期待してして下さい。

⑦-18 【 実戦投資講座 】 2003.11.21

『11月26日に大地震が起こるのか?』

今年に入ってから5月26日に『三陸南地震』（マグニチュード7・1）、7月26日に『宮城連続地震』（同6・4）、そして9月26日に『2003年十勝沖地震』（同8）と大きな地震が2ヵ月毎の26日にピタリと発生している。このため次は11月26日が危ないという不安が広がっている。

たしかに3回続けてマグニチュード6以上の大きな地震が、2ヵ月毎の26日に発生するという現象は、偶然にしては出来過ぎているとも言えるので、不安が高まるのも無理はない。だが、やはりこれは、たまたまそうなかっただけであり、だから次は11月26日に大地震が起こると判断するのは、さすがに暴論であろう。

だからと言って安心していいわけではない。

9月26日の十勝沖地震は、場所が人口の少ない北海道だったから、あの程度の被害で済んだが、実際にはマグニチュード8という規模は阪神大震災のマグニチュード7・2はもとより、関東大震災のマグニチュード7・9をも上回る巨大地震だった。日本でマグニチュード8クラスの大地震が起きたのは94年10月の『平成6年北海道東方沖地震』以来9年ぶりのことである。

日本列島が、地震の活動期に入ったとみる専門家は多い。

なかでも注目されるのは、やはり東京を中心とする南関東が地震活動期に入ったとみられることだ。

防災科学技術研究所の岡田義光氏によると、最近400年間の東京で震度4～6の地震が起きた回数を調べてみたところ、注目すべき事実が浮き彫りになった。

東京で震度6を記録した1923年の関東大震災や1894年の東京湾北部地震など、大きな地震の前後に、震度4または5の地震も多く発生している。

しばらく震度4～5の地震がない静穏期が続いたあと、震度4～5の地震が次々に起こり始めると、静穏期から活動期に移ったことを知らせるものであり、やがて大地震が発生するわけだ。

東京では1940年から1980年まで震度5以上の地震はなかったが、1985年と92年に震度5の地震が起きて活動期に入ったことを示した。しかも震度4の地震については、関東大震災前後の回数並みに増えている。つい最近も9月20日に千葉県東方沖で、10月15日には千葉県北西部でそれぞれ地震が発生し、東京都心部とともに震度4を記録した。

確実に大地震に向けてのカウントダウンがなされているとみるべきであり、東京湾を震源とする東京直下型地震や、千葉県房総南東沖の空白域を震源とする大地震が、最も有力視される。

これとは別に東海大地震の発生リスクも高まる一方なのだ。備えを怠ってはならない。

⑦-19 【 実戦投資講座 】 2003.11.28

『不動建設が経営再建計画発表』

かねてから大地震に対する備えとして保有させてきた、不動建設が先週金曜日に発表された経営再建策を受けて、86円まで値下がりしています。下げているとはいえ、18日につけた最安値の77円は下回っていません。

先週末に発表された、経営再建策は第一が減資の実施、第二は同じ新日鉄グループの東証1部のテトラと企業再生ファンドのフェニックスキャピタルに、総額70億円の第三者割当増資を行ないます。更に、メインバンクなどが300億円規模の債務免除を行なう予定です。

そして、不採算部門だった建築部門を東証1部のナカノコーポレーションに売却し、不動建設は得意の土木部門に専念して、経営を立て直すことにしています。株価が下げているのは、減資が嫌気されているものですが、これは大いなる勘違いです。冷静に考えればすぐわかることですが、この再建計画により、不動建設は信用不安が解消されて立ち直すことになるのです。しかも、フェニックスキャピタルは東証1部の市田の筆頭株主になっているほか、東急建設にも第2位の大株主として経営建て直しに乗り込みました。不動建設、市田、東急建設はいずれも東京三菱銀行がメインバンクであり、すなわち、三菱主導による一連の企業再生プランに加わったわけです。そして、不動建設は2004年2月期末で抱えていた不良資産や赤字の関係会社などを一気に整理します。これにより、400億円以上の損失を表面化させて、一時的に債務超過になりますが、第三者割当増資や債務免除などで、直ちに債務超過を解消します。その上、現在約700億円ある有利子負債を半分以下の300億円弱にまで減らして、財務体質も健全化させます。赤字の建築部門を切り離しますので、収益力も向上します。

このように考えてくれば、減資というだけで、投げ売りをする人々はあまりにも短絡的というべきです。不動建設はこれによって、財務体質と収益が急回復していき、懸案だった復配も実現できるようになりますので、減資で売られたところは大地震に対する備えのために買い増しをする絶好のチャンスとなるでしょう。短絡的チョーチン筋が投げ売りをしてきたことを私は笑いをこらえてみています。信用で買っている人はこのさい現引きをするべきです。なぜならば、目先の値上がりで利食ったり、値下がりですぐ手仕舞い売りをする銘柄ではないからです。あくまでも大地震に対する備えのために現物で保有するようにしましょう。目先投資は別の銘柄で行なうべきです。

⑦-20【 実戦投資講座 】 2003.12.19

『選択を間違えると・・・』

結婚にせよ、就職にせよ、何であれ選択を間違えると結果に大きな差が開いてしまい、下手をすると一生を棒に振ることになりかねない。もちろん資産運用も例外ではない。

経済の変動リスクをヘッジするために、資産を外貨で積極的に運用するのは、けっして悪いことではない。

だが、外貨イコール米ドルしか頭にないのでは、余りにも単純かつ世間知らずである。少なくとも財テク、資産運用の世界においては、そのような浅はかなことでは成果は上がらない。

円の対ドル相場は、昨年2月に1ドル=135円で円安のボトムをつけて以降、一貫して円高トレンドが続いており、直近では一時106円台をつけた。135円から107円まででも21%の円高になっているから、この間、米ドル建てで投資していた分は、2割強目減りしていたことになる。

ところが同じ外貨でも、まったく対照的な動きになっているのが、オーストラリア（豪）ドルとニュージーランド（NZ）ドルだ。

豪ドルは昨年2月初めに83円まであって直近でも81円の水準まで円安になっている。

またNZドルも昨年2月初めの時点で58円の水準だったのが、今年7月初めに73円まであって現在も72円の水準まで円安になっている。

昨年2月初めから直近までで、米ドルは21%円高になっているのに対して、豪ドルは16%の円安。NZドルも24%の円安になっているから、まったく正反対の動きだ。したがって同じ外貨投資と言っても、米ドル建ての投資と、豪ドルあるいはNZドル建ての投資をしている人とは、運用成果がまったく違ってしまおう。

早見は会員の方々に対して、一貫して高利回りの豪ドル建て及びNZドル建てMMFで余裕資金を運用するよう呼びかけ、自分の娘の教育資金積み立ても、豪ドル建てMMFで行っていることを公開してある。そのやり方がいかに的確であるかが、この1年半以上の期間で証明されているわけだ。

外貨建て投資には、その他にもユーロや英ポンド、スイスフラン、カナダドルがあるが、**前記と同じ期間をとってみると、ユーロは13%円安、英ポンドは変わらず、スイスフランは8%円安、カナダドルは4%円高になっているから、やはり主だった外貨の中で、この1年半以上の成果は豪ドルとNZドルがトップであった。**

このように外貨建て投資と言っても、どの通貨をチョイスするかは非常に大きな問題なのである。

今後の展開を考えると、来年3月までにオーストラリアは更なる利上げが予想されているので、豪ドルに対して円安傾向が当分続くとみられる。

⑦-21【 実戦投資講座 】 2003.12.26

『2004年の注意すべき問題』

順調であれば来年の日経平均は1万2千円から1万3千円を目指して一段と上昇していくでしょう。しかし、来年の五黄土星という星回りは吉凶両極端にぶれることを意味する星回りです。

2004年も大きなアクシデントが起こらない限り株価は上昇していくと言う但し書きがつきます。

日本、あるいは全世界を揺り動かした大事件が起きた年をさかのぼってみると、1707年に宝永の大地震と富士山の大噴火が起きました。1860年は桜田門外の変で大老・井伊直弼が暗殺されました。1905年はロシア革命、1914年は第一次世界大戦がはじまりました。1923年は関東大震災、1932年は5・15事件で犬養首相が暗殺されたほか、満州が建国されてその後の日中戦争、太平洋戦争へと拡大していく幕開けとなりました。1941年は日米が戦争を開始、1950年は朝鮮戦争、1968年はアメリカでキング牧師とロバート・ケネディが暗殺されました。1986年はロシアのチェルノブイリで原発の重大事故が発生しました。そして1995年は阪神大震災と地下鉄サリン事件が発生しました。

以上かかげた年号と事件は、実は共通する重大な意味を持っています。例えば富士山の大噴火が起きた1707年ですが、その数字をすべて合計すると15になります。更にその1と5を足すと6になります。このやり方で以上の年号を全て計算してみてください。そうすると以上の年号は全て結果は「6」となります。つまり、「6」の年に日本や世界を大きく揺り動かした天変地異や戦争、暗殺など大事件がことごとく発生しているのです。これは昔から伝わる数秘術と言われる世界の話ですが、数秘術では6という数字はサタンの数字とされています。

2004年は言うまでもなく2と4を足せば6となる恐るべき年を迎えるのです。したがって大きな事件が起こらなければ日経平均は一段と上昇していくトレンドにありますが、来年は歴史に残るような大事件、大事故、あるいは天変地異が発生する可能性が極めて大きいと見ています。その場合は東京株式市場に限らず全世界のマーケットが大混乱に陥ることも懸念されます。そうしたことを頭に入れた上で、現実の株価上昇についていきリスクヘッジをしながら買いで儲けていくという二面作戦をとっていくことが求められるのです。

私はそのリスクヘッジのために金、および金鉱株を持続させているほか、できるだけ外貨建ての資産を保有するように指導してきました。そして大地震に対する備えで不動産も持続させています。そうしたリスクヘッジはそのまま継続させます。その上で2004年も積極的に株を買って儲けて頂くつもりです。

⑦-22【 実戦投資講座 】 2004.01.16

『2004年の注意すべき問題』

順調であれば来年の日経平均は1万2千円から1万3千円を目指して一段と上昇していくでしょう。しかし、来年の五黄土星という星回りは吉凶両極端にぶれることを意味する星回りです。

2004年も大きなアクシデントが起こらない限り株価は上昇していくと言う但し書きがつきます。

日本、あるいは全世界を揺り動かした大事件が起きた年をさかのぼってみると、1707年に宝永の大地震と富士山の大噴火が起きました。1860年は桜田門外の変で大老・井伊直弼が暗殺されました。1905年はロシア革命、1914年は第一次世界大戦がはじまりました。1923年は関東大震災、1932年は5・15事件で犬養首相が暗殺されたほか、満州が建国されてその後の日中戦争、太平洋戦争へと拡大していく幕開けとなりました。1941年は日米が戦争を開始、1950年は朝鮮戦争、1968年はアメリカでキング牧師とロバート・ケネディが暗殺されました。1986年はロシアのチェルノブイリで原発の重大事故が発生しました。そして1995年は阪神大震災と地下鉄サリン事件が発生しました。

以上かかげた年号と事件は、実は共通する重大な意味を持っています。例えば富士山の大噴火が起きた1707年ですが、その数字をすべて合計すると15になります。更にその1と5を足すと6になります。このやり方で以上の年号を全て計算してみてください。そうすると以上の年号は全て結果は「6」となります。つまり、「6」の年に日本や世界を大きく揺り動かした天変地異や戦争、暗殺など大事件がことごとく発生しているのです。これは昔から伝わる数秘術と言われる世界の話ですが、数秘術では6という数字はサタンの数字とされています。

2004年は言うまでもなく2と4を足せば6となる恐るべき年を迎えるのです。したがって大きな事件が起こらなければ日経平均は一段と上昇していくトレンドにありますが、来年は歴史に残るような大事件、大事故、あるいは天変地異が発生する可能性が極めて大きいと見ています。その場合は東京株式市場に限らず全世界のマーケットが大混乱に陥ることも懸念されます。そうしたことを頭に入れた上で、現実の株価上昇についていきリスクヘッジをしながら買いで儲けていくという二面作戦をとっていくことが求められるのです。

私はそのリスクヘッジのために金、および金鉱株を持続させているほか、できるだけ外貨建ての資産を保有するように指導してきました。そして大地震に対する備えで不動産も持続させています。そうしたリスクヘッジはそのまま継続させます。その上で2004年も積極的に株を買って儲けて頂くつもりです。

⑦-23 【 実戦投資講座 】 2004.01.23

最近若い女性の間で、マンションを買う事が一種のブームのようになっている。マネー雑誌に限らず一般の雑誌でも、そうした女性たちに関する記事をよく見かける。

しかし、早見は一貫して、こうした女性（に限らないが）たちのマンション購入に厳しい批判をしてきた。その第一の重要なポイントは、マンションを買えば資産になるという安易な発想に大きな落とし穴があるからだ。

週刊ダイヤモンドの1月24日号で、山崎元氏が面白いコラムをお書きになっていた。それによると、あるファイナンシャルプランナーが山崎氏に次のような事例を話してくれたのだと言う。

「昨年春、東京都心部に近い場所のワンルームマンションを2400万円で買った人が、事情があって購入から半年後に売ることになったのだが、なんと売却価格は半値の1200万円だった」という恐ろしい話である。だが現実なのだ。

もうひとつ雑誌の記事から引用しよう。週刊文春の1月22日号で、『サラリーマンでも大家さんになれる46の秘訣』（実業之日本社刊）の著者である藤山勇司氏が、次のようにコメントしている。

「たとえば5千万円の新築マンションを買ったとすると、諸経費込みで5400万円ほど支払わなければならない。買ってからただちに売却したとしても、買った時点で中古物件になってしまうため、最低でも10%程度値引きしなければならない。これに諸経費を考え合わせると、1千万円以上の損失が出てしまう」

「賃貸に回したとしても、利回りが低いうえにローン金利の負担分があるので更に実質利回りは低下する。新築物件を買うのは不動産業者や金融機関を喜ばせるだけだ」

マネー雑誌などには投資用マンションの広告がよく出ているが、そうした広告に釣られて手を出す人が多い。

しかし藤山氏は「本当に有望な物件なら、わざわざ巨額の広告費と営業マンを動員して売らさうか。広告費、人件費は新築物件の価格に上乗せされているので、その分割高になる」と述べている。

前出の山崎氏もマンション投資を勧めてきたセールスマンに、「そんなに有利なら、どうして御社自身がオーナーにならないのか」

と言って追い返したそう。

安易に投資利回りを追求したり、若い女性に多い「老後が心配だから」「家賃を払うのがもったいない」というような安直。短絡的な発想でマンションを買うと、とんでもない事になる。

そして、これはマンションに限らず株でも同じなのだ。安易に物事を考え、単細胞的にお金をつぎ込む人には、とがめがある。お金は恐ろしいのだ。

⑦-24【 実戦投資講座 】 2004.02.06

聖書の中にあるイエス・キリストが語った話ですが、分りやすくするために現代に置き換えてご紹介します。

ある店の主人が長期間出かけるので、3人の社員にそれぞれ能力に応じてお金を渡しました。社員Aには500万円、Bには200万円、Cには100万円を渡して出かけたのです。

Aはさっそく500万円を元手に商売をして、更に500万円儲け、Bも更に200万円儲けて、2人とも預かったお金を2倍に増やしたのです。

これに対してCは、地面に穴を掘って100万円を隠したのです。

やがて店に帰った主人は、AとBに「よくやった。お前たちには多くのものを任せよう。」と言って2人を誉め、喜びました。

ところがCに対しては、「なぜお前は銀行にお金を預けておかなかったのだ。そうすれば利息がついたのに。お前には1円もやらぬ。その100万円を1千万円持っているAにやりなさい」と怒ったのです。

イエスは更に続けて、こう付け加えました。「誰でも持っている者は与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまで取り上げられてしまうのです。役に立たぬしもべは外の暗やみに追い出さない。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」

この話は聖書に出て来る財テクの話として有名です。もちろんイエス・キリストの真意は金儲けの勧めにあるわけではありません。

このたとえ話で注目してほしいのは、主人が3人にお金を預けるにあたって、“能力に応じて”金額を変えたという点です。これは差別ではありません。分相応にと言うべきでしょう。金額の大小が問題なのではなく、主人は、3人が預かったお金をどうするかを見たかったのです。

結果として、主人が分相応と見たとおり、最も能力のあるAと能力のないCとでは、その差はスタート時には400万円だったのが、主人が帰った時点で900万円にも拡大してしまいました。

差が開いたと言うならAとBだってスタート時の300万円から600万円に拡大しました。でも主人はBもAと同等に誉めましたね。Bも精一杯頑張ったからです。

多くのサラリーマンがリストラされ、若者は安易にフリーターに流れている現在の日本ですが、巷では「貧乏でもいいじゃないか。年収300万円で暮らそう」などという本が売られています。開き直りですね。

しかし、私に言わせれば最初から積極的に努力せず、リスクを取らず、低収入でいい、などと言っているのは、ただのフヌケとしか思えません。Cのように穴を掘ってお金を埋めるのと同じです。投資の世界にあってはなおさらです。積極的にリスクを取って行動しましょう。求めない限り与えられません。結局あとになって後悔するのです。

⑦-25【 実戦投資講座 】 2004.02.13

『 中国株投資 』

第2次中国株ブームと言える状況になりつつある。

中国株に投資する投資信託は、昨年12月末時点で43本。純資産残高は3148億円で、史上初めて3千億円を突破した。43本の投信のうち12本は昨年新規に設定されたものであり、純資産総額も一昨年末に比べて2倍に増えている。

今年に入ってから個人投資家の人気は上々で、SMB Cフレンド証券が1月に設定した中国株投信は、発表後1週間で70億円を集めた。

更に、従来最大の中国株投信はJPモルガンのファンドで、純資産額は520億円だったが、1月29日に大和証券が設定したファンドは当初設定額が622億円に達し、中国株投信としては過去最大になった。

1月末に発表された証券会社の昨年10-12月決算でも、中国株が収益に寄与していることが浮き彫りになった。

たとえば東海東京証券の場合、外国株取扱い高のうち中国株の割合は、昨年4-6月は18%だったのが10-12月は62%にも拡大しており、10-12月の株式トレーディング利益23億円のうち10億円を中国株で稼ぎ出している。

中国株投信の場合、組み入れ銘柄の大半は香港証券取引所に上場している中国株で運用されている。その香港市場のハンセン株価指数は、昨年4月の安値8331ポイントからほとんど押し目らしい押し目もなく値上がりが続けており、今年1月27日に1万3780ポイントの高値をつけた。この間の上昇率は65.4%に達している。日経平均も昨年4月に安値をつけたが、その後10月まで47.8%上昇したものの、いまだに10月の高値を抜けないので、香港市場の強さが目につく。

さて、日本の個人投資家が中国株に投資する場合、投信はともかくとして、株そのものとなると扱っている証券会社は少ない。

代表的なのは、東洋証券、内藤証券、アイザワ証券、DLJ証券といったところ。

このうち東洋証券は香港、上海、深センの各株式市場と取引可能で、中国株のレポートが充実している。しかもオンライン取引利用者は日経クイックの株式情報サービスが無料で利用出来るメリットがある。

内藤証券は付帯サービスはたいしたことはないが、上海、香港、深センの全銘柄が取引できる。特に上海株式市場に強いとされており、完全リアルタイムではないが、若干のタイムラグ程度で約定出来る。

アイザワ証券は香港、台湾、韓国などアジア株全般を取り扱っているのが特色。こうしたマーケットについては株価もリアルタイムで速報している。

さて、早見も今年は中国株に目を向けて、レポート等で銘柄推奨をおこなっていきたいと考えている。お楽しみに。

⑦-26 【 実戦投資講座 】 2004.02.20

『 海運株は歴史的な大相場へ 』

早見は昨年春にズバリと新和海運を買い推奨して、以後一貫してこの株を追いかけてきた。昨年12月にラジオたんぱから発売されたカセットテープでも。推奨銘柄は新和海運1本に絞った。

しかし、新和海運に限らず、今回は海運株そのものが空前の大相場コースにあるとみている。その中で業績変化率が大きい中小の海運株に投資妙味を感じているわけだ。

ポイントは何と言っても運賃市況のすさまじい値上がりである。なかでも不定期船の運賃が大変な値上がりを見せている。

不定期船は主に鉄鉱石や石炭、穀物などを運んでいるが、指標となるバルチック海運指標は5365ポイントで、年初に比べて608ポイント、率にして約13%上昇している。穀物を運ぶ主要航路である米メキシコ湾-日本間の運賃は、トン当たり68.5~69ドルで、年初に比べて32%もの上昇ぶりだ。まさにハネ上がっていると言ってよい。現在の不定期船の運賃は過去最高を更新し続けており、長年の経験を持つ海運会社の経営トップにとっても、過去に例を見ない異常な状況になっているのである。

もちろん運賃の上昇は不定期船だけではない。北米向けコンテナ船（家電製品、自動車部品、家具、衣料、機械などが中心）も運賃は前回の高値だった2000年の水準に迫っており、タンカーも昨年初め以来1年ぶりの高値になっており、指標となるワールドスケールは、昨年10月の安値40ポイントから、今年に入って165まで急上昇した。

このように運賃が大きく値上がりしているのは、中国向けの原材料と中国からの製品出荷が活発化して、世界的に船が不足してきているからだ。

当然船はすぐには作れない。たとえば鉄鉱石を運ぶ船の場合、全世界の造船所を合わせても、2006年までにたった3隻しか新たに造られないので焼け石に水だ。造船所もフル操業で、今から発注しても完成するのは3~4年先なので、海運会社は船の不足を背景に強気の営業をしている。

たとえば乾汽船の場合、2004年3月期の連結経常利益は3億5千万円から11億5千万円に大幅上方修正され、実に22年ぶりに3円復配に踏み切るが、この会社の過去最高の経常利益は1989年3月期の1億9千万円なのだ。それを15年ぶりに更新するだけでもすごいのに、なんと一気に6倍もの利益を出すのだから驚くべきことである。

乾汽船の株価は、1987年に1940円の高値をつけている。しかし、利益が前回の最高額を一気に6倍も上回るなら、株価も1940円×6=1万1640円に大化けしてもいいはずだ。

つまり、そのぐらい今回の海運株は大相場に発展していく可能性を秘めているのである。こうした歴史的なトレンドをつかまえるところに投資の醍醐味がある。

⑦-27【 実戦投資講座 】 2004.03.05

『 相場師に学ぶ① 』

早見のお気に入りの温泉旅館のひとつが、箱根の『強羅花壇』という宿だ。この旅館は戦前から戦後にかけて、兜町で勇名をはせた相場師、“ギューちゃん”こと佐藤和三郎が、夫人に与えて経営させていたものである。

今回から著名な相場師の生きざまや相場への取り組み方から学ぼうという趣旨で、連載を行なっていく。

第一部で佐藤和三郎を取り上げたのは、獅子文六の小説『大番』のモデルともなり、東宝でも『大番シリーズ』4本の映画にもなった（主演・加藤大介）ため、その名をよく知られているからだ。

ちなみに小説と映画のビデオは、現在でも手に入れることが出来る。特にビデオはなかなか面白い。相場師をテーマにした映画、ビデオはほとんどなく、大番シリーズが唯一なので、ぜひ一度ご覧になることをお勧めする。入手方法は次のとおり。

◎映画ビデオ

- ・大番
- ・続・大番・風雲編
- ・続々・大番・怒涛編
- ・大番・完結編

加藤大介の当り役となった映画。マドンナ役に原節子。その他淡島千景、仲代達矢、三木のり平、有島一郎などが共演。四国の貧農出身のギューちゃんが、昭和初期の兜町で相場師として大儲けしたり破産したり。当時の時代風景や歴史の流れも参考になる。古き良き時代の株式市場を知るにもよい。4本とも昭和32～33年、東宝作品。定価1本6500円。

申し込み先：フェーマスレコードクラブ

0120-03-1100

◎小説

- ・大番 上下巻（獅子文六著）定価各巻1800円 発行：ゼネックス 発売：星雲社

小説と映画の“ギューちゃん”は、四国の貧農出身と設定されているが、実像の佐藤和三郎は新潟県の貧農の出である。しかし、ひと旗上げようと上京して株屋になった点では同じである。

早見は日本の相場師で唯ひとり尊敬するのは、山崎種二（旧山種証券創立者）だけである。実際成功者として人生を全うした。特に買だけでなくカラ売り、ツナギ売りで大戦果を上げた。

これに対して、唯ひとり愛すべき好人物としてとらえているのが佐藤和三郎だ。それは単純極まりない猪突猛進タイプで、人間の表裏がなく、憎めない人柄に思えるからだ。

では、佐藤和三郎、“ギューちゃん”の足跡をたどりながら、株式投資のうえでの教訓を得ていくことにしよう。

⑦-28【 実戦投資講座 】 2004.03.12

『 相場師に学ぶ② 』

この連載は、次の書籍を参考資料にしている。

『相場師列伝』（東洋経済新報社）

『大相場師』（同）

『相場師』（日本経済新聞社）

『相場師異聞』（河出書房新社）

『相場師奇聞』（同）

相場師というのは、ある時は華々しい大活躍をして巨万の富を築くが、その多くは必ずしも安楽な末路とは言えない。むしろ破産や自殺という例が多く見受けられる。

大阪・北浜を舞台にして市場を大きく揺り動かした岩本栄之助は、今も残る大阪市公会堂（中之島）を寄付したが、第一次大戦による株価大暴落でまず買いで大失敗し、次いで今度はカラ売りに回り、戦争景気の熱狂的大上昇相場で再び大失敗をした。ついには39歳の若さでピストル自殺したのである。

山梨県が生んだ大相場師・雨宮敬次郎は、一般の人々にはまったく知られていない。しかし、実は軽井沢の別荘地帯を開拓した人物である。彼なくして今の軽井沢は無いのだ。相場師であると共に明治の鉄道王でもあった。今の金額にして100億円とされる巨万の富を築いたが、明治31年頃の北炭株の買い占め仕手戦において、ついに没落の憂き目にあった。

第一次大戦の好景気に乗って、材木で大儲けした石井定七は、その後大正10年の鐘紡新株の買い占めで、発行株数16万株に対して21万株もの買い玉を建てて大勝負を挑んだ。この仕手戦で借金の総額は今の金額にして約2千億円にも達し、日本一の借金王と異名をとったが、大正11年2月、実弟が振り出した小切手が不渡りとなり、これが石井の不渡りとなえられて鐘紡新株が大暴落。立会い停止になってしまった。この結果追い証が払えなくなり、ついに石井は43歳で破産。その後交通事故で死んだ。

岩本、雨宮、石井などの例は代表的なものだが、他にも悲惨な末路をたどった相場師は数多い。

そんな中であって、“ギューちゃん”こと佐藤和三郎は、相場の失敗による破産、夜逃げなどを繰り返しながら返り咲き、最後は大きな資産を残して死んでいった。

“ギューちゃん”というニックネームは、小説『大番』で獅子文六が命名したものだが、株式市場で言う「ブル」（牡牛）＝強気買い、から来ている。その名の通り、佐藤和三郎は猪突猛進型で、単純に買いまくるタイプであった。なぜその株を買うのかという理論は、あとでついて来るといって直感的行動派だ。

こうした単純な人物は、相場の世界では浮き沈みが激しく、最終的には失敗しやすい。実際ギューちゃんも大儲けと大損を繰り返した。最初の大勝利は満州鉄道株の買いで、今の金額にして約5千万円の大金をたちまち手にした。

⑦-29 【 実戦投資講座 】 2004.03.19

『 相場師に学ぶ③ 』

株屋になって最初の仕手戦に挑んだ“ギューちゃん”は、満鉄（南満州鉄道）株で今の金額にして約5千万円の大金をつかんだ。

映画『大番』では、この勝利で有頂天になったギューちゃんが、愛人に銀座の宝石店で一番高価なダイヤモンドの指輪を買い与え、ついでに居候していた愛人の家も買い取ってしまうシーンがある。

それだけではなく、故郷の実家に5千円を贈って家を新築させたが、当時は東京でも3千円で2階建ての立派な家が立てられた頃だから、田舎なら1500円もあれば十分な家が建てられたという。それを5千円ポンと贈ったのだから、ギューちゃんがいかに得意絶頂だったかが分る。ロクな食べ物もない田舎で、これだけの新築をしたという事は、現代とは比較にならない大変なインパクトを故郷に与えた。たしかにそれが名声を高める事になり、無形の財産を作ったには違いない。

したがって、ポンと大金をはたく事が、いちがいに悪いとも決めつけられないが、とは言え、やはり「勝ってカブトの緒を締めよ」という格言があるように、色々と理屈をつけても、やはり儲けたからと言って大尽気どりで金をバラまくのは慎むべきであり、ロクな相場師とは言えない。有頂天になっている時には、目の前に落とし穴が口を開けて待っている事に気づかないものなのである。

ギューちゃんにも得意の絶頂から一転して奈落の底に叩き落とされる悲劇が待っていた。今のお金にして5千万円儲けたのに、今度は5倍、10倍も儲けてやると意気込んで鐘紡の買いで大勝負をかけた。

ところが五・一五事件のクーデターが発生。株価は全面急落相場になった。これに対してギューちゃんは親友の忠告を無視して、意地を張って買い増しをしていく。その結果ついに今の金額にして5千万円を超える大損を出したのである。当然全財産は吹き飛び、なお2千万円ほどの負債を抱える羽目になったのだ。このあたりのエピソードは、映画第1作目『大番』のクライマックスシーンだ。そして、ついに兜町から夜逃げして田舎に帰ったのである。

まさに猪突猛進型のタイプが大損をする典型的なパターンである。

相場というのは、ある一時期は面白いように儲かるが、やがて必ず調子が狂ったり、見込みが外れる時がやって来る。それ自体は誰にも訪れるものだ。

そのように逆風になってきたら、くれぐれも意地を張ってはいけない。たとえそこで損を出しても、小さな損にとどめさえすれば再び立ち上がれるのだ。

相場を力づくでものにしようとせず、相場の流れに素直についていく姿勢が大切である。

⑦-30【 実戦投資講座 】 2004.03.26

『 相場師に学ぶ④ 』

前回、ギューちゃんが鐘紡の買いで大勝負をかけたところ、五・一五事件で株式市場が全面急落したため、破産してしまったエピソードを書いた。

せっかく親友が忠告してくれたのに、意地を張って買い増しをしていったのが命とりになったわけだが、多くの一般投資家にも当てはまる、心当たりのある失敗であろう。

ここで大切なのは、我々は投資家というよりも、本来は投機家であり、会社を売り買いするのではなく、株価を売り買いして値ザヤを稼ぐのが仕事だということである。

ところが往々にして多くの人々は考え違いをする。つまり材料や業績、経営内容などにこだわってしまうのだ。その結果無意味に株主となり塩漬け状態になる事が珍しくない。

ギューちゃんの失敗も、そこに原因がある。相場の世界では、生真面目で慎重な人、義理堅い人ほど失敗しやすい。逆に積極的で、かつ臨機応変に動き、手の平を変えたように立場を変える事が出来る人の方が成功しやすいと思う。

くどいようだが、一般の人々は経営に参加するわけではないのだから、株価の動き、トレンドの変化だけに神経を集中させ、値ザヤ稼ぎに専念すればいいのだ。

ゆえにテクニカル分析が威力を発揮する。株価の変化を客観的にとらえるには、テクニカル分析に勝るものはない。これを馬鹿にする人間は、天にツバするのに等しい。

たとえば昨年秋の早見の大ホームランになった東急建設の株価を振り返ってみよう。会社分割後10月1日に再上場してから11月5日の大天井1730円まで4倍以上に大化けした。この間、短期トレンドを示す5日線は一貫して上昇を続けただけでなく、株価は5日線が下支えとなり値上がりしていった。

ところが11月5日に1730円の最高値をつけたものの、その日の終値は1382円、300円安と急反落して巨大な陰線となり、翌日の終値1182円で5日線を大きく割り込み、更にその翌日の終値1201円で5日線はついに下向きに転じ、以後11月19日の安値500円まで連日棒下げになっていった。この時、ギューちゃんのように意地になって買っていったら、間違いなく破産だろう。

仮に5日線が下向いたところで見切りをつけて手仕舞っても1201円だから、上場時の400円台に比べて大儲けなのである。テクニカル分析に従って売りに回った人と、あきらめられずに更に買っていった人とでは、まさに天国と地獄であった。

このようにギューちゃんの失敗は、誰にでも起こりうるものであり、それを防ぐにはテクニカル分析を重視するのが一番の近道なのである。

個人の相場観や損得勘定などは、相場の世界では基準に出来ないのである。

⑦-31 【 実戦投資講座 】 2004.04.23

『 相場師に学ぶ⑤ 』

ギューちゃんの時代には、テクニカル分析と言ってもローソク足のケイ線ぐらいしかなかったが、今や数多くの分析手法があり、面倒な計算をしなくても、パソコンの画面上で複雑な分析手法が簡単に表示出来る。

またパソコンを使わなくても、市販のチャートブックを買えば、ローソク足と移動平均線による分析は誰にでも出来る。

ちなみに、数多くの複雑な分析手法を使う必要はない。究極的には昔ながらのローソク足だけでも十分に投資は出来る。高額なお金を払って、“秘法”のようなものを買う必要はない。本当にそんな秘法が存在するなら、他人に売る必要はないからだ。

早見が通常使用している分析手法も、ローソク足、移動平均線、一目均衡表の3つだけで、極めてシンプルである。必要に応じてパラボリックやカギ足などを使う事はあるが、普段は3つで十分なのだ。

デイトレーダーや、プロのディーラーなどは、もっと高度で複雑な手法を駆使しているだろうが、早見は常に最も底辺の投資家や初心者に、株式投資の面白さ、相場の魅力を知ってもらいたいと願って仕事している。そういう人々が高度で複雑な分析手法を自分で使いこなせるだろうか。

そんなものがなくても、ローソク足なら新聞とグラフ用紙さえあれば誰でも描ける。続いて、それに電卓ひとつで移動平均線を描き加える事はすぐ出来る。実はこれだけでもいいのだ。この2つさえきちんと理解し、読めれば、どんな初心者でもちゃんと株式投資をやっていく事が出来る。一目均衡表はそれに慣れた人が一段進む上級編なのだ。

早見の仕事は最も簡便だが、基本をしっかりマスターすれば大丈夫だ、という事を広く訴え、普及させていくところにある。だからあえて簡単なやり方を自ら実践する事にこだわっているのである。

前回、東急建設を例にとり、5日線という最も短い移動平均線を使うだけで、どれほど大儲けして、大損を防ぐ事が出来たかを書いた。基本を馬鹿にして軽く見てはいけない。

相場は欲と欲、強気と弱気がぶつかり合う戦いなのである。たとえ大将と言えども武器を何も持たず、丸腰で戦場に行けば、たちまち首をハネられてしまうだろう。まして非力な足軽。つまり大多数の個人投資家はなおさらである。武器を持たねば大損して殺されても文句は言えないのだ。

相場師たちは、まさにその戦場で生死を賭け、財産を賭けて真剣勝負を挑んだ。多くの個人投資家は趣味や頭の体操、カルチャーセンターのような考えで相場に参加するが、だから殺されるのである。

株式投資、すなわち相場に参加するのは戦いだと自覚しよう。だからテクニカル分析という武器が必要なのだと知ってほしい。

⑦-32【 実戦投資講座 】 2004.05.21

『 なぜ損するのか—A氏の例 』

ある人から、「お前のQ2放送を聴き始めて、48日間で過ぎたが、この48日間でなけなしの退職金の300万円がほとんどパーになった。もうお前の話なんか聴かない！！」という怒りのFAXが届きました。

そのFAXに、どういう売り買いをしてきたかが書かれてありましたので、「かわいそうに、この人は一生株では成功しないな」と思いました。お気の毒ですが、早見を責める前に、自分の間違ったやり方に気づかない限り、私以外の誰の話の話を聞いても同じ失敗を繰り返すのです。だから、かわいそうな人なのです。

この人の名前をA氏としましょう。A氏はQ2放送を聴き始めた時、すなわち4月13日と14日に、集中的に岩谷産業、ニチモ、日本冶金工業と、その時に出された推奨銘柄を次々に買い込んでしまったのです。これがダメなのです。

その理由は第一に、たかだか300万円程度の資金でアレもコレもと手を出すこと自体が非効率です。**資金量が少ない人ほど集中投資を心がけなければ、元金はなかなか増えていきません。**

第二に、たった2日間で一気に3銘柄を買うのは、まさに「手当たりしだい」であり、その株の魅力、推奨理由などロクに頭にいれず、したがって確信が無いから、下がってくるとうろたえるのです。買うからには、なぜ買うのか、ちゃんと納得して投資すべきです。そのように内容を吟味すれば、いっぺんに3つも買うはずがなく、集中買いになっていくはずはです。

第三に、同じ時期に動いているものは、同じ時期と一緒に調整に入るので、買う時期をある程度ズラしていかないと、銘柄を分散しても無意味なのです。A氏のやり方は、まさにこのパターンであり、3つ買って、3つとも一緒に下げて苦しむのは当たり前なのです。

ですから、誰の話の話を聞いても同じだと断じたわけです。

これは会員として入会した直後にも、よく見られる失敗のパターンにも似ています。**入会したばかりの人は、最初の推奨銘柄にいきなり全資金を注ぎ込んだり、A氏のように入会直後に次から次へと片っぱしから推奨銘柄を買っていき、たいていの場合失敗します。**

A氏に限らず、こういう例を私はウンザリするほど見てきました。つくづく人間というのは、浅ましいものだと思います。

お気の毒ですが、相場の世界は弱肉強食の戦いの場ですから、道理に合わない、セオリーに反することをやっている人々は、消えていく運命にあります。

こういう人たちが、たまたまに持株を大損で投げ売りしていくところを、シメシメと買いに行く人たちが勝利を手にするのです。

⑦-33【 実戦投資講座 】 2004.06.04

『 相場師に学ぶ⑥ 』

「勝って兜の緒を諦めよ」とよく言われる。相場師として満鉄株で初めての大勝利を手にしたものの、そこで有頂天になって散財したあと、みごとにスッテンテンになった話を③で書いておいた。

当時の金で約10万円。今の金額にして約4～5千万円の大金をひと勝負で手にしたわけだから、有頂天になるのも無理はない。ギューちゃんがまだ23歳の時の話である。現代でも大学出たての若者が、こんな大金を手にしたら、正気を保つほうが難しいだろう。

もっとも平成バブルの頃には、株や不動産で大金を手にして豪遊した話はいくらでもあったし、ITバブルの時もベンチャー企業の若手経営者たちが、渋谷に集まり盛大なパーティーをしょっちゅう繰り広げていた。そうしたうかれたバブルの乱痴気騒ぎは、結局うたかたの夢と消えていったのである。

ところで、小説『大番』に、“チャップリンさん”という老人が登場する。いつもチャップリンと同じいでたちで、相場を張るでもないのに、兜町を歩き回っている変人だ。誰ともつき合いがなく、誰も相手にしないのだが、このチャップリンさんが、ギューちゃんに「満鉄を買いまくれ」と教示して、大成功につながったのである。

このチャップリンさんは、昔は天竜将軍と呼ばれ、第一次大戦の大相場で大当たりをとり、一族を連れて世界一周旅行に出かけたという人物設定がされている。

そのチャップリンさんが、小説の中で次のようなセリフを述べている。

「僕は今年で32年間、相場を一心に眺めているが、10年ほど前からやっと相場の実体がわかってきた。僕の予測は10年前からピタリと当って外れたことはない。なぜかと言うと、僕はその頃から一切相場に手を出さないと決めたからだ。金儲けに夢中になっているうちは目が開かない。と言って欲がなければ相場をやる必要もない。そこがむつかしいところだよ。」

この言葉は、実に仏教的、禅的な言葉なのである。

人間は死ぬまで欲から離れることは出来ない。悟るというのは欲を無くすことではない。そうではなく、欲があって、欲にとらわれないことこそが大切なのである。心が自由自在に動けるのが良いのである。

しかし、人間は欲が執着につながり、望みと違う方向になると迷いが深まる。執着と迷いが自分をがんにがらめにしてしまうから、物事を冷静、客観的に見ることが出来なくなってしまう。相場の読みが当たるわけがない。チャップリンさんが、「金儲けに夢中になっているうちは目が開かない」と言っているのは、そういうことである。もちろんギューちゃんが23歳にして、そんな境地になれるわけもない。果してみごとに大失敗した。

⑦-34 【 実戦投資講座 】 2004.06.25

『 相場師に学ぶ⑦ 』

チャップリンさんのアドバイスに従って、満鉄株で大儲けをしたギューちゃんだが、初恋の女性に、イイカッコを見せようとして墓穴を掘ってしまう。

初恋の女性は郷里の名家、大地主の令嬢で、現在は貴族の跡取りである海軍士官と結婚している。貧農の出であるギューちゃんは、コンプレックスもあって、もっともっと大金を儲けて見返してやろうと意気込んだ。

映画『大番』を観るとよく分るが、戦前の田舎の大地主というのは、今の金持ちとは比較にならない破格の存在であり、まさに殿様と同じ扱いを受けていたのである。

実は早見も九州・鹿児島の実家がそうであった。鹿児島でも隅々この方の本当の田舎であるが、先祖は薩摩藩の時代に中国との密貿易で富を築いた豪商であり、大地主だった。それが戦後の農地解放で財産を失ったのである。

しかし、それでも昭和30年代後半から40年代前半にかけて、筆者が小学生の頃、父の実家に里帰りして道を歩いていると、見ず知らずの町の人たちが、「〇〇さんの坊っちゃん」と言って、皆でいねいおじぎをして挨拶してくれる。その意味が後になって話を聞いて納得出来た。

たとえ財産を失っても、小作だった人々は元の大地主に対する一種の敬意を忘れていなかったのである。もっともあれから30年も経つから、もうそんな空気は跡形もなく消えてしまったであろうが。戦後まだそういうものが残っていたのだ。

戦前の田舎の暮らしは、今とは比べものにならないくらい貧しかったわけで、ギューちゃんも「メザシとカンコロ飯しか食べなかった」と口ぐせのように言っていたし、ギューちゃんの友人の漁協の職員が、夫婦ゲンカで女房に向かって「そやけどお前、1年365日、メザシとカンコロ飯だけの弁当じゃ、誰だって飽きるわい」と悪態をついていた。

それが普通だった貧しい庶民に対して、ギューちゃんの郷里の大地主・森様の屋敷は、まるで大名屋敷のように広壮で、令嬢は東京の女学校に“留学”。里帰りをした令嬢の夫はオープンカーで出迎えを受け、人々から“殿様”と呼ばれていた。まさに雲の上の人々だ。そのあたりは映画『大番』を観ると実によく分る。

さて、そもそも生まれが違う人々に対して、張り合うというのは大変なことであり、ましてそこに女性が絡んでくるとややこしくなる。

相場師の世界は「飲む、打つ、買う」の典型であり、酒と女性は常につきまとう。必ずしもそれが悪いとは思わないが、特に女性が絡むと冷静、客観的な判断がしにくくなりやすい。まして、イイ所を見せたい、見返してやりたいなどと考えると、もう怪しくなってくる。

ギューちゃんは友人の忠告を無視して暴走してしまう。

⑦-35【 実戦投資講座 】 2004.07.09

『 相場師に学ぶ⑧ 』

初恋の女性を意識して、「20万円の儲けなど序の口だ。100万円儲けたら、1千万儲けたらどうする。1億儲けて、三井、三菱と肩を並べたら、お前らだって俺を安く扱えないだろう」と、ムキになったギューちゃん。

生まれも育ちも違う上流社会の人々を向こうに回して、貧農から成り上がった彼にとっては、カネで対抗するしかなかった。

満洲事変が始まり、株式市場は大きく下げていた。当時の花形株であった新東（東京株式取引所新株）は、192円から50円も下げていた。世の中には不況色が広がっていたが、ギューちゃんは、そろそろ買い出動の頃合い到来とみて、鐘紡株の買いに乗り出した。この下げ相場は近く必ず上げに転じ、満洲の新市場開拓が見込まれて、鐘紡が真っ先に値上がりしてくるとみたのである。

ところが、ギューちゃんが買い出動した201～202円から、翌日には一気に196円に急落。その後いったん反発したものの、再び下げて190円まで崩れてしまった。幸い、それからしばらくして200円台を回復してきたので、彼は再び強気になり204円でまた買い付けたのである。

さァこれからと意気込んだギューちゃんに、恐しい地獄への特急電車が待ち構えていた。なんと五・一五事件が発生して、犬養首相が暗殺されるというクーデターが起きたのである。株式取引所も閉鎖されてしまった。

だがギューちゃんは、なお強気を崩さなかった。皮肉なことに立会いが再開されて鐘紡は反発した。もし、これでチャンスとばかりに手仕舞いすれば利食いになっていたのだが、彼は205円で更に買い乗せたのである。これが致命傷になった。

ギューちゃんの強気買い乗せを知って、親友が血相を変えて忠告した。

「ギューちゃん、やめろ！！今すぐに売れ！！ムチャなことをするな！！」

親友が青くなったのは無理もない。205円で買い乗せた分を加えると、ギューちゃんの信用建て玉は大儲けして作った財産の総額を突破していたからである。つまり、これで失敗したら、スッテンテンになるうえに赤字で足が出て借財を背負うことになるのだ。

だが、ギューちゃんは考えを変えず、親友の忠告をハネつけた。これで彼の運命は完全に決まったのである。それからズルズルと鐘紡株は下げていき、184円まで下落した。彼はついに持ちこたえられずに損切り。合計22万7千円の大損を出し、全財産を失ったばかりでなく、約8万円の足を出し、借財を背負う羽目になったのである。

時にギューちゃん、23歳。血の小便を出し、白髪も生えてきた。当時の金で8万円というのは、今で言うと3千万円ぐらいになる。総額で約1億円に相当する大損をして、家も追い出され、家財道具も全て売り払い、それでもなお3千万円の借金を抱えたら、自殺しても不思議ではない。だが、ギューちゃんは死ななかった。

⑦-36 【 実戦投資講座 】 2004.12.03

このところ、当コーナーはしばらく休んでいましたが、今週から再開することになりました。

さて、相場師“ギューちゃん”の足跡をたどってきたわけだが、鐘紡株の相場で大失敗して、今のお金に換算して総額1億円に相当する大損を出し、約3千万円の借財を背負って、兜町から夜逃げする羽目になった。

しかし、考えてみればノンビリした時代である。夜逃げしても、ほとぼりが冷めたらまた戻ってきて相場を張ったり、ブローカー仕事をしたりして食べていけたのである。現代では考えられない。まさに古き良き(?)時代である。

それはともかく、“ギューちゃん”は、五・一五事件で相場が崩れても、負けを認めずに意地を張って手仕舞いをしなかった。あくまでも買いにこだわった。それが致命的な大失敗につながったのは言うまでもない。

相場の世界にあっては、昨日まで調子良く儲けていたお金を、たちまち減らしていくなどというのは日常茶飯事である。

失敗することは免れない。だからこそ大切なのは致命傷にならないようにする工夫であり、ただ儲けることのみを前提にしていたり、売るべきときに売らないのは問題を大きくする。

そこで早見は、テクニカル分析を重視するようにアドバイスしている。自分の頭で色々考え、悩んでいてもラチがあかない。テクニカル分析のサイン、シグナルに忠実に従うほうが良い。

まずは最もポピュラーな移動平均線をしっかりと勉強しよう。移動平均線とローソク足の組み合わせは基本中の基本である。

一般投資家は、複雑な分析手法など不要だ。誰でもすぐに分り、簡単に当てはめることが出来る手法で十分なのである。大切なのは理論ではなく、その手法を信じて実践することなのである。

⑦-37 【 実戦投資講座 】 2004.12.17

有名な相場格言に「ケイ線屋、ケイ線引き引き足を出し」というのがある。格言というよりは皮肉だが、これは現代でも当てはまる。

ケイ線屋という仕事は今では絶滅したが、昔は兜町の路上で、色々な銘柄のケイ線を貼り出して講釈し、予想を売る人々がいた。競馬場の予想屋と同じである。

映画『大番』でも、兜町の橋のたもとで、ケイ線屋とおぼしき人物が、道ゆく人をつかまえては講釈しているシーンが出てくる。これもまた昭和30年代くらいまでの兜町の風物詩のようなものだ。

さて、冒頭の相場格言は、職業的予想屋に限らず、一般の個人投資家の中でも、チャートを作成するのを趣味のようにしている人々がいるので、そうした人々をも含めて、ケイ線屋と総称している。

ケイ線、チャートを作成するのは悪くないが、段々とチャートを作成することが趣味となってしまう、ケイ線、チャートの講釈ばかり一人前で、肝心の投資成果にまるっきりつながらないことを皮肉っているのである。

かつてはグラフ用紙に手書きでケイ線を記入していたのが、今はパソコンで簡単に複雑なチャートも表示出来るようになった。便利になったのは好ましいことである。

だが、かつての単純なローソク足が複雑な各種のテクニカル分析に変わっただけで、「ケイ線引き引き足を出し」の本質は、さほど変わっていないのではなかろうか。

チャートを眺めて、この形がどうの、このパターンがどうのと理屈ばかり並べているだけで、行動が伴わなければ意味がない。

要するに理論と実践、実戦は違うのだ。理論で勝負が決まるなら、学者、研究者はことごとく資産家になれるだろうが、世の中そんなに甘くはない。

チャート分析で学位を取るわけではなかろう。理屈を並べるより、実践で成果を上げていくよう心がけるべし。

⑦-38 【 実戦投資講座 】 2005.01.07

“ギューちゃん”こと、佐藤和三郎氏が残した遺産として、よく知られているのは、箱根の高級旅館『強羅花壇』と、富士山麓にあるゴルフ場『富士高原ゴルフコース』がある。悲惨な末路をたどる例が多い相場師の世界にあって、こうした遺産を残せただけでも幸せと言うべきである。

佐藤氏は典型的な猪突猛進型であり、儲けも大きい損も大きく、財を成せるタイプではなかった。

猪突猛進の例として、40年不況のドン底のところで、株価がふた桁の日本郵船を買い、守尾良くその後値上がりしていった時のケースがある。せっかく天与の大底買いに成功したのに、佐藤氏は株価が上がるにつれて、気を良くしてドンドン買い上がっていったのである。

これでは平均買いコストが上昇していく一方になり、いったん株価が天井をつけて下げに転じると、たちまち評価損に転じてしまう。

こういうやり方をする投資家は実に多い。たくさん買えば儲けも大きくなると欲をかくのだが、これは錯覚にすぎない。永遠に上がり続けることはないのに、上げていくことしか考えないのだから。

百歩譲って、買い上がっていくのであれば、いったん流れが変わったとみたら、ただちに手仕舞いしていく機敏さが必要だ。だが多くの人々は買うことは出来ても、売るのは苦手である。これでは財は成せない。

有名な『孫子の兵法』にも「小敵の堅（かたき）は、大敵のとりこなり」という言葉があり、勝ち目が少ない形勢不利な状況で、意地を張って戦い続けてもダメだ、と戒めている。

手の平を返すというのは、一般世間では快く思われないが、こと相場の世界では、ただ突き進むだけではダメであり、手の平を返す大胆さ、冷徹さがなければ生き残れないということを肝に銘じよう。

⑦-39 【 実戦投資講座 】 2005.01.14

このシリーズは、猪突猛進の相場師、“ギューちゃん”を取り上げました。締めくくりにあたり、徳川家康の訓話と伝えられる言葉をご紹介します。

「人の一生は重荷を負って遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起らば困窮したる時を思い出すべし。堪忍は無事長久の基。怒りは敵と思え。勝つ事ばかり知って負くる事を知らざれば、害、その身に至る。己を責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。」

これは大変有名な言葉ですが、実は徳川家康は米相場に手を出していました。米が安くなると買い占め、値上がりすると放出していたのです。そうしたエピソードも踏まえると、尚更、現代の投資家にも味わい深いと言えます。

デイトレーダーが大流行しており、いくら儲けたという話が雑誌や単行本で数多く紹介され、我も我もと短期売買に走ります。しかし、ひと握りの才能と運に恵まれた人以外は、誰もがデイトレードで成功できるわけではありません。

儲けることばかり考えず、損することも常にわきまきましょう。失敗は成功の母です。他人の説やアドバイスに従って損したからといって、頭に血が上り、他人を責めてばかりいては、いつまで経っても成長しません。性急に成果を求めるばかりでなく、時にはチャンスを待つ。思いどおりになるまで我慢することも必要です。

今の世の中は、余りにも速さを求め、安直に結果を求めようとする面が目立ちます。もとより短期投資そのものが悪いのではなく、過ぎたるは及ばざるが如し、なのです。

ウサギとカメの話にもあるように、ただ突っ走るだけだと、どこかで大きな墓穴を掘るでしょう。結局私たちは何らかの重荷を背負わざるをえないのです。それを忘れないで下さい。

今回を持ちまして、実践投資講座は終了させていただきます。長い間のご愛顧ありがとうございました。